

生物学類の卒業研究発表会のかたち

千葉 親文 (筑波大学 生命環境科学研究科、生物学類卒業研究発表会世話役)

「おおらかな時代の発表会に戻してあげられたら・・・」という思いが私としての生物学類卒業研究発表会との関わりの初めだったように記憶しています。私が卒業研究発表会の世話役になったのは4年前です。この頃の発表会はまるで活気がなく、4年生が準備し4年生が発表し、4年生が聴く、まさに「4年生の、4年生による、何のための発表会？」というものでした。それでも、卒業研究発表会は学生の自主的取り組みとして大変評価すべきものでした。もともと生物学類の卒業研究発表会は、有志が集い4年間の学業の成果を語り合う場であったようです。私のイメージする理想的な生物学類卒業研究発表会は次のようなものです。

まず、発表会は後輩が企画する。そして、4年生の先輩を招待し卒業研究の話を聴く。その後で慰労会を催し、研究室の裏事情などを聴く。これらを研究室を選ぶ際の参考にする。一方、4年生にとっては研究成果を発表する最高の舞台です。教員にとっても研究内容を学生や他の教員に宣伝するよい機会です。教員はこれら全てを理解しサポートしてやる。

現生物学類長の佐藤忍先生は、そうした学生の素晴らしい取り組みに対して全ての生物学類教員が協力する体制をサポートしています。1998年、徳永幸彦先生は、発表会の内容をインターネットによって世界に向けて発信

する道をつけて下さいました。2002年、その後を引き継いだ私は、3年生がリーダーシップをとって発表会を企画・運営し、4年生に最高の場を与えることを提案しました。生物学類生の皆さんはそれを我が物として受け入れ、現在のかたちをつくってくれています。林純一前生物学類長は、2002年からつくば生物ジャーナルを通して卒業研究発表会要旨集を世界に向けて配信する一方で、これらを冊子体として発表会前に全ての生物学類の学生と教員に配布することを実現されました。4年生にとっては最高の記念といえましょう。さらに昨年度からは、1-4年生まで生物学類の全て学生、そして全ての教員が参加するかたちになりました(詳しい経緯は、「2005年、生物学類卒業研究発表会での新しい試み」林純一、つくば生物ジャーナル 4:1(2005)をご覧ください)。また、丸尾文昭先生のご助力なくしてはこれらの取り組みはなかなか進まなかったと思います。大変感謝しています。

私が提案してからすでに4年が経ちました。その頃の1年生が今年度の卒業研究発表会の主役です。素晴らしいことです。まだまだ技術的に改善すべき点がありますが、生物学類が描く理想の卒業研究発表会のかたちは、もうすでに今の生物学類生のものになっていると感じます。

Contributed by Chikafumi Chiba, Received February 10, 2006.